

1 東京都・大阪市中心卸売市場の需給動向(令和4年12月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は12万5446トン、前年同月比102.0%、価格は1キログラム当たり238円、同99.2%となった。
- 大阪市中心卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は4万2175トン、前年同月比103.1%、価格は1キログラム当たり210円、同97.2%となった。
- 2月の見通しについて、天候不順から出回り不足が続き、市場が荷物の引き合いを強め、高値傾向の展開と予想される。

(1) 気象概況

上旬は、低気圧が短い周期で通過し、通過後は北日本を中心に冬型の気圧配置が強まり、寒気が流れ込んだ。このため、北日本では気温が低く、北日本日本海側では大雪となった所があった。また、北・東日本日本海側では降水量が多く、北・東・西日本太平洋側では少なかった。西日本日本海側では、高気圧に覆われやすかったため、降水量がかなり少なかった。旬平均気温は、東・西日本では平年並だった。旬間日照時間は、北日本日本海側と沖縄・奄美で少ない一方、西日本日本海側が多かった。東日本日本海側と北・東・西日本太平洋側では平年並だった。

中旬は、期間のはじめは高気圧に覆われて全国的に晴れた日もあったが、13日に低気圧と前線が日本海を通過した後は、冬型の気圧配置となる日が多かった。このため、北日本と東・西日本日本海側を中心に曇りや雪または雨の日が多く、西日本太平洋側を中心に晴れの日が多かった。また、旬の中頃からは強い寒気が流れ込んだため、全国的に気温が平年を下回った。14日から16日にかけてと18日から20日にかけては、冬型の気圧配置が強まり、北・東日本日本海側では山形県、福島県、新潟県を中心に記録的な降雪となった所もあった。また、九州を含め西日本の平野部でも雪が降った。このた

め、旬降雪量は東日本日本海側でかなり多く、北・西日本日本海側では多かった。旬平均気温は、北・西日本と沖縄・奄美で低く、東日本では平年並だった。旬降水量は、北・東日本日本海側と沖縄・奄美で多かった。一方、西日本日本海側で少なかった。北・東・西日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は、北・東・西日本日本海側、北日本太平洋側、沖縄・奄美で少ない一方、西日本太平洋側が多かった。東日本太平洋側では平年並だった。

下旬は、22日から23日にかけて低気圧が日本海と本州南岸を進み、低気圧が北海道付近を通過した後は26日まで強い冬型の気圧配置となり、北海道などで暴風雪となった。また、山形県や石川県を中心に北日本から西日本の広い範囲で大雪となった。21日と27日以降は冬型の気圧配置が緩んだ。このため、東日本日本海側では曇りや雪または雨の日が多く、沖縄・奄美では曇りの日が多かった。23日の降雪の深さの日合計は、高知で18センチと、1953年の統計開始以降、通年で最も大きくなり、徳島で11センチと、1953年の統計開始以降、12月として最も大きくなった。旬間日照時間は、東日本日本海側と沖縄・奄美でかなり少なかった。強い寒気が西日本を中心に南下して気温が大きく低下した時期があったが、北日本は、低気圧に向かって暖かい空気が流れ込んだことや寒気を中心から離れていたことから、旬平均気

温はかなり高かった。旬平均気温は、東・西日本と沖縄・奄美で低かった。旬降水量は、東日本日本海側でかなり多く、北日本日本海側と北・東日本太平洋側で多かった。西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美では平年並だった。

旬間日照時間は、北日本太平洋側で少なく、東日本太平洋側で多かった。北・西日本日本海側と西日本太平洋側では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図1）。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
西日本					日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	

資料：気象庁「12月の天候」



(2) 東京都中央卸売市場

12月の東京都中央卸売市場における野菜の

入荷は、入荷量は12万5446トン、前年同月比102.0%、価格は1キログラム当たり238円、同99.2%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（12月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	125,446	102.0	98.6	238	99.2	96.4	200	233	287
だいこん	10,979	101.9	98.1	66	110.8	85.2	51	59	91
にんじん	8,591	100.3	99.8	118	114.4	98.3	106	114	135
はくさい	15,327	99.8	96.7	42	124.3	80.0	39	39	48
キャベツ類	13,335	95.3	97.4	69	123.7	83.7	56	70	87
ほうれんそう	1,609	108.4	115.5	455	99.4	85.2	346	430	632
ねぎ	6,013	105.6	104.5	292	112.2	95.8	269	274	328
レタス類	6,962	105.6	100.1	187	95.9	79.9	122	179	277
きゅうり	3,887	87.2	93.0	496	146.0	109.2	346	473	711
なす	1,257	94.5	99.8	414	93.2	80.3	395	426	427
トマト	4,545	101.5	94.5	412	91.2	99.3	417	402	417
ピーマン	1,586	89.9	97.7	487	136.9	111.3	403	475	644
さといも	1,646	98.9	104.5	315	99.6	95.0	270	311	342
ばれいしょ	7,994	116.2	100.5	121	56.5	91.9	120	118	125
たまねぎ	9,500	106.2	96.8	108	59.0	99.8	108	108	108

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんが下旬に向け価格を上げ、安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をわずかに下回った(図2)。

葉茎菜類は、レタスの価格が出荷の前進により上旬に苦しい販売が続ぎ、下旬に上げたものの、大幅に安めに推移した前年をやや下回り、平年を2割強下回った(図3)。

果菜類は、きゅうりの価格が下旬に高騰し、

大幅な安値で推移した前年を4割以上上回り、平年を1割近く上回った(図4)。

土物類は、ばれいしょの価格が大幅に高めに推移した前年を4割以上下回り、平年をかなりの程度下回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

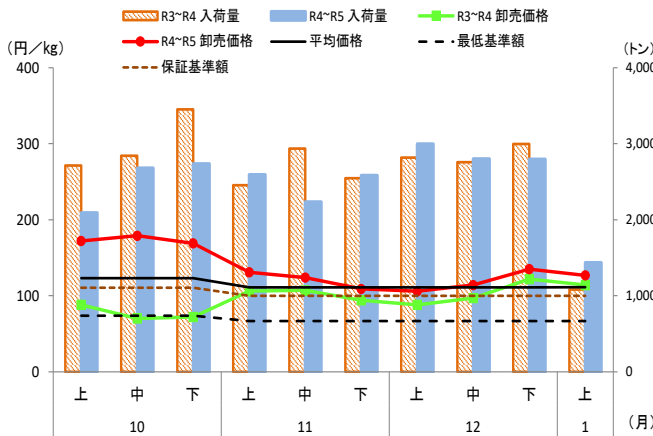


図3 レタスの入荷量と卸売価格の推移

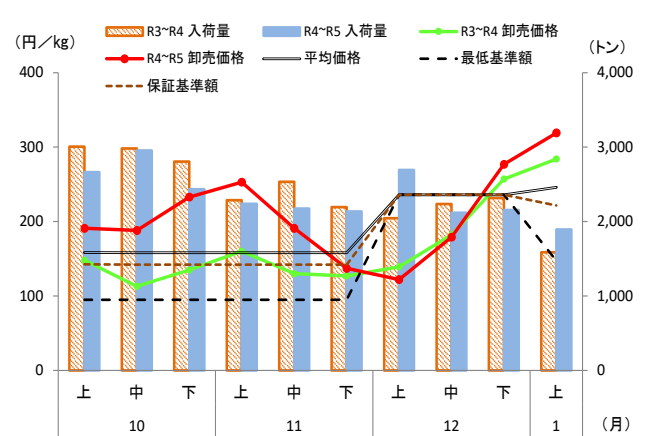


図4 きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

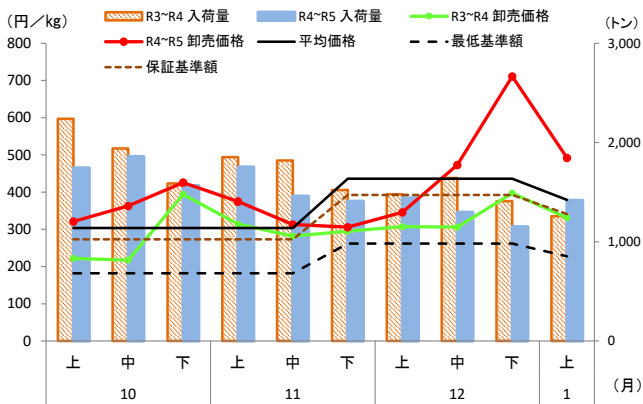
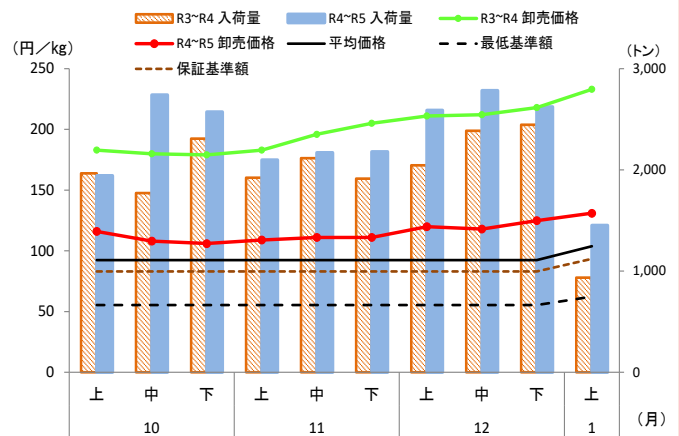


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6力年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	12月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>千葉産、神奈川産中心の入荷となった。千葉の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、降雨と日照不足による病害が散見された。神奈川産の作付面積は前年をやや下回り、干ばつにより肥大は遅延気味であったが、11月下旬の降雨と気温上昇により生育は回復した。総入荷量は少なかつた前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>数量不足の懸念から下旬に価格を上げ、大幅な安値で推移した前年を1割ほど上回り、平年を1割以上下回った。</p>
	にんじん 	<p>千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、播種(はしゅ)期の大雨の影響で発芽不良や欠株などが散見されたが、肥大期の気温上昇と適度な降雨で肥大は良好。総入荷量は前年並み、平年並みとなった。</p> <p>下旬に向け価格を上げ、安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をわずかに下回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みから一部減となり、生育は順調であったが11月の高温でアブラムシの発生が散見された。総入荷量はほぼ前年並みで、平年をやや下回った。</p> <p>価格は豊作基調から下旬に向けてわずかに上がり、大幅な安値で推移した前年を2割以上上回り、平年を2割下回った。</p>
	キャベツ類 	<p>愛知産、千葉産中心の入荷となった。愛知産の作付面積は前年並みで、生育初期の降水量が少なかつたため生育はやや遅延。千葉産の作付面積は前年並みで、病虫害も少なく生育は順調。総入荷量は前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>下旬に向けて価格を上げ、大幅な安値で推移した前年を2割以上上回り、平年を2割近く下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>群馬産、茨城産を中心とした関東産の入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みで、11月の温暖な気候により生育は前進傾向。一部虫害が散見されたが病害は少なく、中旬までは順調であったが、下旬の降雪により年末に向け露地作を中心に大幅に減少した。総入荷量は中旬までの潤沢な入荷から前年をかなりの程度上回り、平年を1割以上上回った。</p> <p>価格は不足感が出た年末に向け大幅に上げたものの、安めに推移した前年並みとなり、平年を1割以上下回った。</p>
	ねぎ 	<p>千葉産、茨城産、埼玉産など関東産の秋冬作が中心の入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みだが、茨城産は前年をやや上回る。11月の温暖な気候により前進傾向。一部病虫害の発生が散見されたものの太りも良く、2L中心で作柄は良好。総入荷量は前年、平年ともやや上回った。</p> <p>価格は下旬に上がったが、大幅な安値で推移した前年を1割以上上回り、平年をやや下回った。</p>
レタス類 	<p>静岡産を中心に茨城産、香川産、長崎産などの入荷があった。静岡産の作付面積は前年並みで、病虫害の発生も少なく、おおむね順調も、中旬以降の気温の低下により生育は、やや停滞した。茨城産の作付面積は前年並みで、雨の影響により一部品質低下が散見されたがおおむね順調で、下旬に向け漸減した。香川産の作付面積は前年をやや下回り、11月の気温高で7~10日程度前進した。長崎産の作付面積は前年並みで、11月の気温高により生育は前進した。総入荷量は少なめに推移した前年をやや上回り、平年並みとなった。</p> <p>価格は出荷の前進により上旬に苦しい販売が続ぎ、下旬に上げたものの、大幅に安めに推移した前年をやや下回り、平年を2割強下回った。</p>	

果菜類	きゅうり 	宮崎産を中心に千葉産、高知産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であったが、低温、降雪の影響により中旬以降減少した。千葉産の作付面積は前年並みで、10月の曇天、日照不足から回復傾向にあったが、12月の低温により焼け果の発生や病害が散見された。高知産の作付面積は前年並みで、11月の夜温が高かった影響により徒長し、下旬の曇雨天、12月の低温により生育停滞した。総入荷量はやや多かった前年を1割以上下回り、平年をかなりの程度下回った。価格は下旬に高騰し、大幅な安値で推移した前年を4割以上上回り、平年を1割近く上回った。
	なす 	高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であったがコナジラミ、アザミウマなど虫害の発生が散見された。病害の発生は例年に比べ少ない。総入荷量はやや多かった前年をやや下回り、平年並みとなった。価格は需要期ではないことから月間を通して大きな動きはなく、中旬以降にわずかに上がったものの、やや安めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年を2割ほど下回った。
	トマト 	熊本産を中心に愛知産、栃木産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、一部病害が散見されたものの発生は前年より少なく、気象条件にも恵まれ生育は順調。愛知産の作付面積は前年並みで、生育は順調。栃木産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も一部で病虫害の発生が散見された。総入荷量はやや少なかった前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。価格は月間を通してあまり大きな動きはなく、やや高めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。
	ピーマン 	宮崎産を中心に茨城産、高知産の入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、出荷時期も終盤となって中旬までにおおむね終了した。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが病虫害が散見された。西南暖地は燃油高による加温不足の低温により、数量がやや伸び悩んでいる。総入荷量は多かった前年を1割強下回り、平年をわずかに下回った。価格は下旬に高騰し、安めに推移した前年を3割以上上回り、平年を1割以上上回った。
土物類	さといも 	埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、8月の適度な降雨と天候に恵まれ、生育はおおむね順調で大玉傾向。中国産の輸入は前年を3割下回った。総入荷量は、やや多かった前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。価格はやや安めに推移した前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。
	ばれいしょ 	北海道産を中心に長崎産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、夏場の豪雨の影響により玉数が多く、小玉傾向でやや歩留まりが悪い。長崎産の作付面積は前年並みで、降雨が少なく小玉傾向も、品質はおおむね良好。乾燥による病害が散見された。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をわずかに上回った。価格は大幅な高値で推移した前年を4割以上下回り、平年をかなりの程度下回った。
	たまねぎ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、豪雨の影響を受けた地域はあるものの、全体としては作柄良好で肥大も良い。生食用の出荷は前年をやや下回る。中国産の輸入は前年の278%となっている。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をやや下回った。価格は大幅な高値で推移した前年を4割強下回り、平年並みとなった。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

12月の大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は4万2175トン、前年同月比

103.1%、価格は1キログラム当たり210円、同97.2%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(12月速報)



品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	42,175	103.1	102.1	210	97.2	96.4	183	206	243
だいこん	4,189	112.0	102.7	74	98.7	90.1	59	63	101
にんじん	2,660	96.1	97.2	134	124.1	108.0	120	130	154
はくさい	6,841	105.7	112.5	57	118.8	88.2	49	51	67
キャベツ類	4,919	100.1	107.2	66	124.5	85.4	53	65	83
ほうれんそう	471	82.4	88.9	466	104.0	87.1	367	438	647
ねぎ	1,357	101.6	101.7	423	103.9	98.3	361	377	509
レタス類	1,291	90.7	92.4	181	102.3	78.4	121	174	264
きゅうり	1,017	88.3	108.4	480	150.9	110.4	331	435	653
なす	435	108.8	126.8	381	98.4	86.2	367	403	374
トマト	1,390	109.8	105.1	393	91.2	100.0	404	396	375
ピーマン	362	87.2	89.1	481	134.0	111.9	420	468	598
さといも	325	97.2	92.8	300	87.2	87.7	267	301	339
ばれいしょ	3,047	110.0	108.0	105	50.7	86.1	102	102	114
たまねぎ	5,335	119.5	103.9	110	65.1	105.7	111	111	109

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」








注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	12月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>鹿児島産と和歌山産が主体となり、長崎産、宮崎産、徳島産などの入荷があった。和歌山産と徳島産は前進出荷し、旬を追うごとに入荷減量となった。鹿児島産は旬を追うごとに入荷増量となり、下旬は前年を大きく上回り、月間でも前年をかなり上回った。月間全体では前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、上旬は前進出荷による影響で安値となったが、年末の品不足感と急な気温低下による入荷量の伸び悩みを懸念し、年末に向けて旬を追うごとに上伸を続けた。下旬には高騰したが、月の前半の安値が影響して月間では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	にんじん 	<p>長崎産を中心に、鳥取産や千葉産、中旬以降は鹿児島産の入荷もあった。急な気温低下や雪の影響により、中旬以降の九州産地が伸び悩んだ。長崎産は前半が多かったため月間でも前年を大幅に上回った。年末商材の香川産の金時人参は潤沢な入荷で、月の前半は太物が多かったが、急な気温低下の影響もあり後半はL・Mサイズが中心となった。全体では前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は全体的な品薄感から高値でスタートし、旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>

<p>葉茎菜類</p> <p>はくさい</p> 	<p>茨城産が中心となり、愛知産や三重産、兵庫産、和歌山産などの入荷もあった。前月までの気温高の影響が上旬まで残り、全体的に前進出荷傾向で上旬の入荷量が多く、単価安となったことから、中旬に入って出荷を抑え気味にする動きがみられ量は減少した。下旬に向けて価格が回復する中で入荷増量となり、月間全体では前年をやや上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は、前月の後半に入荷増量に伴って下落した影響が残り、上旬は単価安となったが、中旬以降の急な気温低下による不足感と需要増に伴って、旬を追うごとに回復して年末には上昇した。月間では安値だった前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
<p>キャベツ類</p> 	<p>愛知産を中心として、茨城産の残量や後続の大阪産などの入荷もあった。中旬以降は干ばつの影響から肥大が悪く、旬を追うごとに入荷減量となり、下旬には降雪もあり日々不安定な入荷が続いた。上旬の潤沢な入荷があったことで月間全体では前年並みとなり、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、中心となるサイズの入荷が伸び悩む中、年末に向けての品薄感から旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
<p>ほうれんそう</p> 	<p>徳島産と福岡産が主体となる入荷であった。前月初めまでは干ばつにより生育停滞していたものが、前月後半から12月上旬にかけての降雨と気温高による前進出荷傾向に加えて、中旬以降の急な気温低下による生育不良が続き、全旬とも入荷量は伸び悩んだ。月間全体でも前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は前月の後半に急落した影響が残り安値スタートとなった。年末に向けて需要が高まる中、絶対量不足から旬を追うごとに上昇を続け、年末には高騰したが、月間では前半の安値が響いて前年をやや上回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
<p>ねぎ（白ねぎ）</p> 	<p>群馬産と長野産が主体となり、鳥取産や埼玉産などの入荷があった。中旬以降の急な気温低下で入荷減量となった産地が多く、月を通して不安定であったが、全体的には平年通りの入荷状況となった。月間全体では前年をやや上回った。</p> <p>価格は月の前半は比較的安定して推移したが、年末の需要期に向けて旬を追うごとに上伸し、年末には上昇した。月間では前年をやや上回った。</p>
<p>ねぎ（青ねぎ）</p> 	<p>青ねぎは徳島産が中心となり、細ねぎは高知産が中心となる入荷であった。急な気温低下と降雪の影響により減少し、月の後半に落ち込んだ。月間全体では前年を下回った。</p> <p>絶対量不足から価格は高値推移となり、下旬にはさらに高騰した。月間では高値で推移した前年並みであった。</p>
<p>レタス類</p> 	<p>結球レタスのラップものは兵庫産と徳島産を中心に香川産など、裸ものは長崎産を中心とする入荷であった。前月までは気温が高く前進出荷傾向で、12月の上旬までは順調な入荷が続いたが、中旬以降に急な気温低下と干ばつから産地出荷量が激減し、年末まで入荷減量が続いた。サニーレタスは福岡産を中心として兵庫産や香川産の入荷もあった。月の前半は単価安の影響により出荷調整がかかったため入荷量は伸び悩んだが、中旬以降にはクリスマス需要に向けて単価も上伸し、入荷量も回復した。下旬の入荷量は前年よりもかなり多かった。リーフレタスは福岡産を中心に徳島産などの入荷があり、サニーレタス同様に月の前半は単価安による出荷調整で減量、下旬に向けて増量となった。レタス類全体では月間で前年、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>結球レタス、サニーレタス、リーフレタスとも月の前半は安値で推移したが、クリスマスと年末年始の需要から引き合いが強く、不足感もあって価格は旬を追うごとに上伸し、下旬に高騰した。レタス類全体の月間では前年をわずかに上回り、平年を大幅に下回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産が中心となり、主力の高知産や徳島産の入荷があった。中旬以降の急な気温低下と下旬にかけての降雪の影響もあり入荷減量となった。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>年末の需要期に向けて絶対量不足となり、価格は旬を追うごとに高騰した。月間では前年の1.5倍となり、平年をかなりの程度上回った。</p>
	なす 	<p>千両系は高知産を中心とし、長茄子は福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。10~11月が気温高で前進出荷傾向であったが、12月に入り中旬以降の急な気温低下により同時期の入荷量が減少した。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。</p> <p>入荷減量に伴って年末に向けて一時的に価格は上昇したが、需要は伸びず、販売に苦戦して下旬には再び下落した。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
	トマト 	<p>愛知産を中心に主力の熊本産などの入荷があった。前月までの着色遅れが12月にずれ込み、気温高から大玉傾向で月の前半は大幅な入荷増量となった。中旬以降は急な気温低下もあり旬を追うごとに減量となったが、月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は入荷量が多い中で伸び悩み、気温低下から荷動きは悪く年末に向けて旬を追うごとに下落した。月間では前年をかなりの程度下回り、平年並みとなった。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。年末に向けて入荷増量となる見込みだったが、急な気温低下や降雪の影響により旬を追うごとに減量した。中旬以降に激減し、月間では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>引き合いは強く、品薄感から価格は旬を追うごとに上昇を続けた。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>愛媛産を中心として山形産などの入荷もあった。年末商材でありながら需要はなかなか伸びず、単価安が続いていることから、産地からの価格維持の要請により出荷を調整して別注対応を取るも、例年に比べて発注量は少なく、年末の入荷量は前年の半量程度に留まった。輸入の中国産の入荷もあったが、原油高や円安の影響などにより産地価格が高く、入荷量は前年の半分程度であった。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>輸入の中国産は入荷量が少なく単価高となる中でも、需要が伸びず国産の単価は伸びなかった。月間全体では前年、平年ともかなり大きく下回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は北海道産を中心として、後続の長崎産の入荷も主体となった。北海道産は旬を追うごとに減量傾向となるも入荷量自体は多く、月間では前年を大きく上回った。長崎産も小玉中心でありながら量は多く、月間では前年をかなり上回った。メイクインは北海道産が中心となり、例年と比べると小玉傾向で入荷量は伸び悩んだ。ばれいしょ全体では前年、平年ともかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、入荷量が多い中で需要が伸びず、高値だった前年の半値程度となり、平年をかなり大きく下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産が中心となり、兵庫産の入荷もあった。北海道産は早生種から中生種への品種の切替えが進み、L大サイズが中心となった。旬を追うごとに減量傾向であったが全旬とも順調で前年よりも多く、月間では前年を大幅に上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は、高値だった前年を大幅に下回り、平年をやや上回った。</p>

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした2月の見直し

年末年始は西日本を中心とする積雪で荷物が市場に届かず、拠点市場を中心に相場は急騰して年末最後の競りを迎えた。年明けの相場は年末の高値で始まったが、市場在庫も多く、一旦は下げると予想される。各産地とも寒波の影響で2月の出回りは少なくなると予想している。

関東の露地物は今のところ凍害が出て出荷が少なくなるといった情報はないが、干ばつで生育が止まっているとの話が多い。また、果菜類は重油代の高騰による加温不足が、出荷の不安定要因ともなっている。晴天が続くことは問題ないが、干ばつとなれば地温が上がらず生育は停滞しがちである。逆に降雨が続くと生育が進み、一転して供給過剰になると予想される。いずれにしても天候不順から出回り不足が続き、市場が荷物の引き合いを強め高値傾向の展開と予想される。



根菜類

だいこんは、千葉産は年内までは前進気味であったが、現状は例年並みの出荷となっている。1月中旬頃には、出荷の谷間となって減少することも予想される。2月にはトンネル物の春だいこんも始まり、生育は順調で、3月にピークとなると予想される。Lサイズ中心の2Lと、肥大も良好である。神奈川県産は基本的に豊作傾向にあり、年末には出荷調整を実施した。年明けは例年と同様のペースに戻っているが、11月の干ばつの影響で形状が悪くなっている。そのため2月まで出荷が減る可能性もある。2月後半には春だいこんに切り換わり、2Lサイズ中心の見込みである。静岡県産は現状本格出荷されており、生育は順調である。乾燥と寒さのためやや小ぶりで、3月まで安定した出荷が予想される。徳島産の昨年末は台風の影響もあってやや少なめの出荷となった。年明けは潤沢出荷が続き、1月末頃にピークとなると予想される。2月に入り徐々に減りながら推移するが、例年並みの状況と予想される。

にんじんは、千葉産は10~11月の高温により大ぶりに仕上がっている。1~2月は霜や葉

の枯れなどにより収穫に手間取り、昨年末よりも出荷量は落ち着くと予想される。出荷は3月いっぱいまで、2月は平年並みの出荷で、L、Mサイズ中心の見込みである。



葉茎菜類

キャベツは、千葉産の現状は乾燥が続き、生育が止まっている。雨が降り次第増えてくると予想され、2月は例年どおりピークになると予想している。愛知産の現状は干ばつ気味で少なめの出荷となっているが、作柄は良好で豊作傾向である。2月には平年並みに出荷できると予想している。神奈川県産の早春キャベツの生育は順調で、2月は一定のペースで出荷されよう。3月には徐々に増えて、春キャベツとなる4月が最大のピークである。

はくさいは、茨城産の12月はやや多めの出荷になったが、1~2月は定植時の長雨の影響により小ぶりで、例年を下回る出荷と予想される。さらに厳寒期の収穫は作業時間が限定されることや、レタスの作業も始まることなどから、2月下旬には減少気味に推移すると予想される。

ほうれんそうは、群馬産の生育は順調で、年内までは前進出荷となったが、現状は例年並みの出荷ペースとなっている。当面のピークは2月の初め頃で、3月に入ると他の作物の作業のために少なくなってくると予想される。埼玉県産の現状は寒さから遅れ気味である。2月には1月の遅れた分が追いついて前年を上回る出荷と予想される。

ねぎは、千葉産は秋冬物となるが、3月いっぱいまでピークが続くと予想される。干ばつが続き、作型によっては細めで、2月に入り数量が伸び悩む可能性もある。それでも基本的に豊作傾向で、前年より多く出荷されると予想される。前年の梅雨明けが早かったこともあり、中心サイズは2Lで太めである。茨城産の秋冬物は病気や自然災害はなく、圃場ほじょうに十分残っている。2月の出荷物は太さも揃い、前年を上回ると予想される。

レタスは、静岡県産の現状は寒波のため出荷は落ち着いてきている。昨年末まで前進傾向であ

ったことも影響し、結果として例年並みの出荷状況となっている。前年の2月も平年並みの出荷になったが、今年も前年並みが予想され、出来は良好である。香川産の現状は寒波と強風の影響により傷みが発生し、少なめとなっている。増え始めるのは1月末頃から始まるトンネル物からで、2月は平年並みの出荷が予想され、最大のピークは3月と予想される。兵庫産の年内は例年より多く出荷されたが、現状は減少傾向にある。干ばつ気味で生育は遅れ始め、出荷の谷間となってきている。1月中旬は気温が高めで降雨も予想されるため、回復も予想される。2～3月は一定の出荷が続くと予想される



果菜類

きゅうりは、群馬産が例年どおり1月15日頃から始まり、年内に定植した物が2月初め頃から、1月初めに定植した物が2月20日頃から始まり、全ての生産者の出荷が揃う。ほぼ例年と同様の組み立てであり、現状は好天が続いて問題ない。ただ寒暖の変化が激しく、需給バランスの崩れを懸念している。埼玉産は重油代の高騰で加温を控えたことから苗の生育が遅れ、定植が半旬程度後ろにずれている。そのため1月下旬から2月中旬までほぼ出荷はない。2月下旬から出荷が始まり、3月上旬にピークとなると予想される。

なすは、高知産は12月23日にかつてない積雪があったが生育には全く問題なかった。1～2月も例年並みの出荷が予想されるが、成り疲れと、今期から単為結果品種「PCお竜」に新たに取り組む生産者の作柄が良好であれば問題なく出荷されると予想される。福岡産の12月の出荷は、寒波や降雪の影響を受けて前年を下回った。1月も少な目で一定の出荷が続くと予想される。2月中旬以降回復してくるが、多かった前年を下回ると予想される。

トマトは、熊本産は年内に続いて1～2月も前年並みかやや多めの出荷が予想される。当面は一定のペースでの販売で、大きさも例年並みにLサイズ中心と予想される。福岡産の生育は順調で、12月は前年の120%、1月も前年を

上回ると予想される。2月には成り疲れもあって落ち着いて来ると予想される。再び増えるのは3月に入ってからで、5月に最大のピークを迎えると予想される。中玉の品種は「フルティカ」、大玉は「桃太郎ホープ」である。愛知産の2月の大玉は一定の出荷ペースが続き、主力の桃太郎系はLサイズ中心に前年並。増え始めるのは3月下旬から。ミニトマトは、千葉産は「サンチェリー」の出荷となり、生育は順調で前年並みの出荷が予想される。ピークは4～5月であり、冬場の出荷は一定のペースで続く見込みである。愛知産は夏の天候不順の影響が残り、2月としては前年を下回る出荷と予想される。

ピーマンは、宮崎産は多かった年内に続いて年明けもピークが続くが、2月には少なくなると予想している。12月後半から急激に冷え込んだ影響で成り疲れがある。2月の出荷は1月の8～9割程度と予想されるが、これは例年並みである。茨城産の2月は温室物と春ピーマンが半々であり、徐々に温室物が減り、春物が増加傾向で推移すると予想され、春ピーマンが出揃うのは3月に入ってから。中心サイズはMで、2月としては前年並みである。



土物類

さといもは、埼玉産は貯蔵物の出荷となっている。21年産はかなりの豊作であったが、22年についても平年作を上回った。1月に続き2月も2Lサイズ中心にLの前年並みの出荷が期待できる。

ばれいしょは、鹿児島産の赤土新ばれいしょは現状、軟弱徒長気味であるが、平年、前年並みの出荷が予想される。前々年は不作で少なかった。出荷のピークは3月上中旬で、2L、Lサイズが中心と予想される。北海道産（道南今金）の22年産は一部水害の発生もあったが、平年作に留まった。2月からは加工用と種苗のための出荷となる。同産（道央空知南）の22年産は豊作で、前年を上回る出荷と予想される。品種は「男爵」「北あかり」「洞爺」「メークイン」「オホーツクチップ」で、Mサイズ中心のやや

小ぶり。市場出荷は4月いっぱいと予想される。

たまねぎは、静岡産が1月に続き黄色たまねぎのピークとなり、作柄は平年並みの状況にある。減るのは3月中旬以降と予想され、サイズはL中心である。北海道産の貯蔵量は平年並みで、不作であった前年より多く、2月も出荷は前年を上回ると予想される。5月まで計画出荷していくが、中心サイズはL大である。熊本産の葉付きの「サラたまちゃん」は2月初めから出荷が始まり、現状は生育順調である。ピークは4月上旬で、徐々に増えながら推移すると予想され、作付けは前年並みである。



その他

ブロッコリーは、香川産は寒さの影響により現状は例年より少なめの出荷となっている。増え始めるのは2月に入ってからで、最大のピークの4月に向けて増えながら推移すると予想される。愛知産は年末年始に寒波の襲来はあったものの、例年どおりの出荷となった。現状は冷えて生育は止まっているが、生育そのものは順調で、2～3月が最大のピークである。

アスパラガスは、佐賀産のハウス物は前年産より株が充実しており、量的に期待できる。前年は遅れたが、今年は2月中旬から増えて、3月の初め頃までピークとなると予想される。新規に栽培を始めた人もいるが止めた人もおり、全体の作付けは微減である。

ごぼうは、宮崎産は新ごぼうが始まっているが、台風の被害により平年の8割程度と予想している。当初ピークを1月と予想したが、予想より集荷できていない。引き続き2月も一定の出荷が続くと予想される。

かんしょは、徳島産の貯蔵量は例年並みで、大きさもLサイズ中心と例年と変わらない。最終の6月上旬まで計画的に販売していく。千葉産の22年産は前年に続き豊作傾向である。2月も「べにはるか」「べにあずま」のLサイズ中心の見込みである。

かぼちゃは、沖縄産が1月から始まっているが、曇天が続いた影響で小玉傾向になっている。2～3月は増えながら推移し、4月がピークと

予想され、中心品種は「えびす」である。

豆野菜は、鹿児島産のスナップえんどうは、12～翌2月までピークで、ほぼ横ばいで出荷され、3月には終盤を迎え、減少しながら推移すると予想される。生育は順調で作柄は良好である。同産のそらまめも順調で、1～2月は増加傾向で推移し、3月中下旬から4月上旬がピークと予想される。同産のグリーンピースは年明けから3月いっぱいまで、大きな波のない出荷が続くと予想される。沖縄産のいんげんは、1～2月は増えながら推移し、3月がピークと予想される。1月は作柄が悪く少なめであるが、2月からは回復して順調と予想している。

たけのこは、熊本産の早い物は昨年11月中旬から始まったが、同県としては表年のため例年以上の出荷が期待できる。また全体にペースは早めで、2月中旬にはピークとなり、4月上旬には例年より早めに切り上がると予想される。

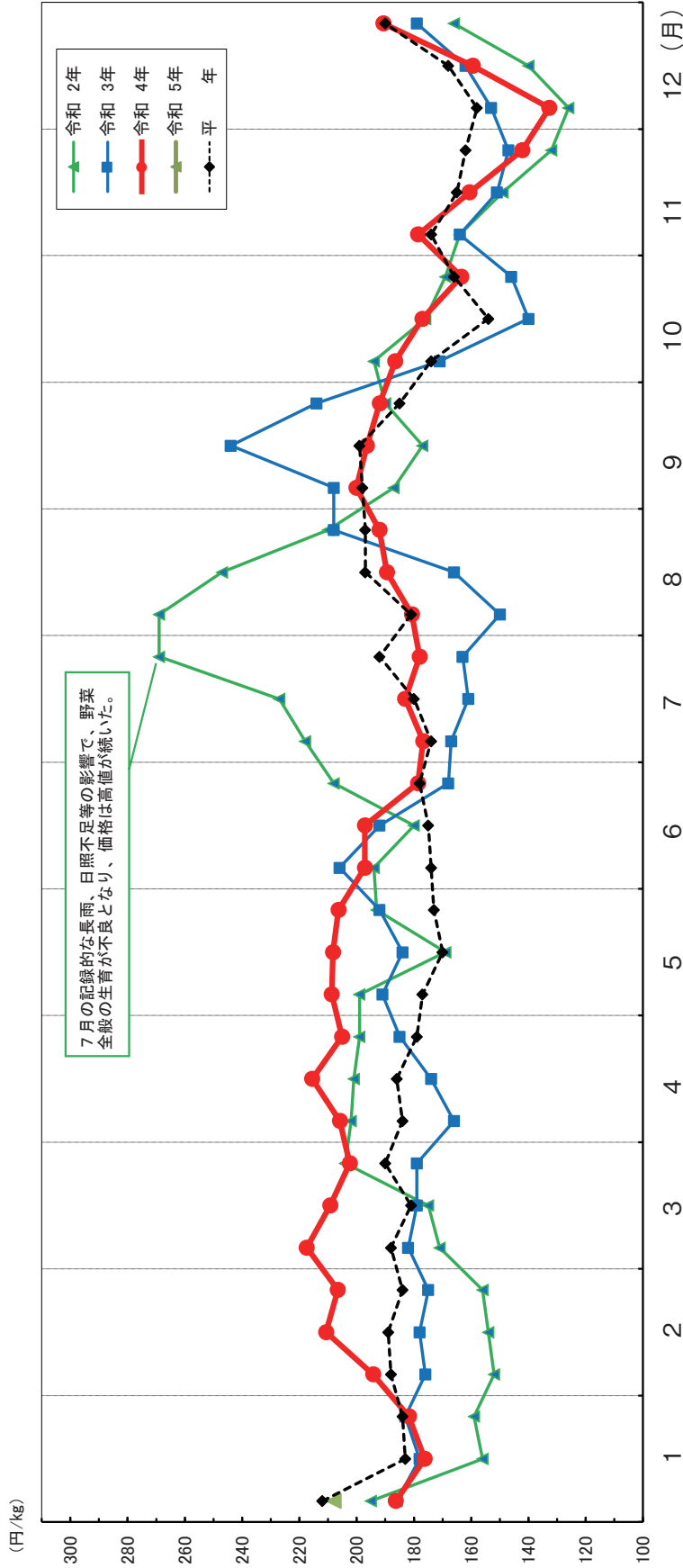
菜の花は、千葉産は12月までは前進傾向で来たが、量的にはそれ程多く出荷されていない。今後の天気次第であるが、2月中下旬に最大のピークになると予想されるが、降雨が続くと前進の可能性もある。

冬瓜は、沖縄産は12月～翌1月は天候に恵まれず少なかったが、2～4月がピークと予想され、例年並みと予想している。

(執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

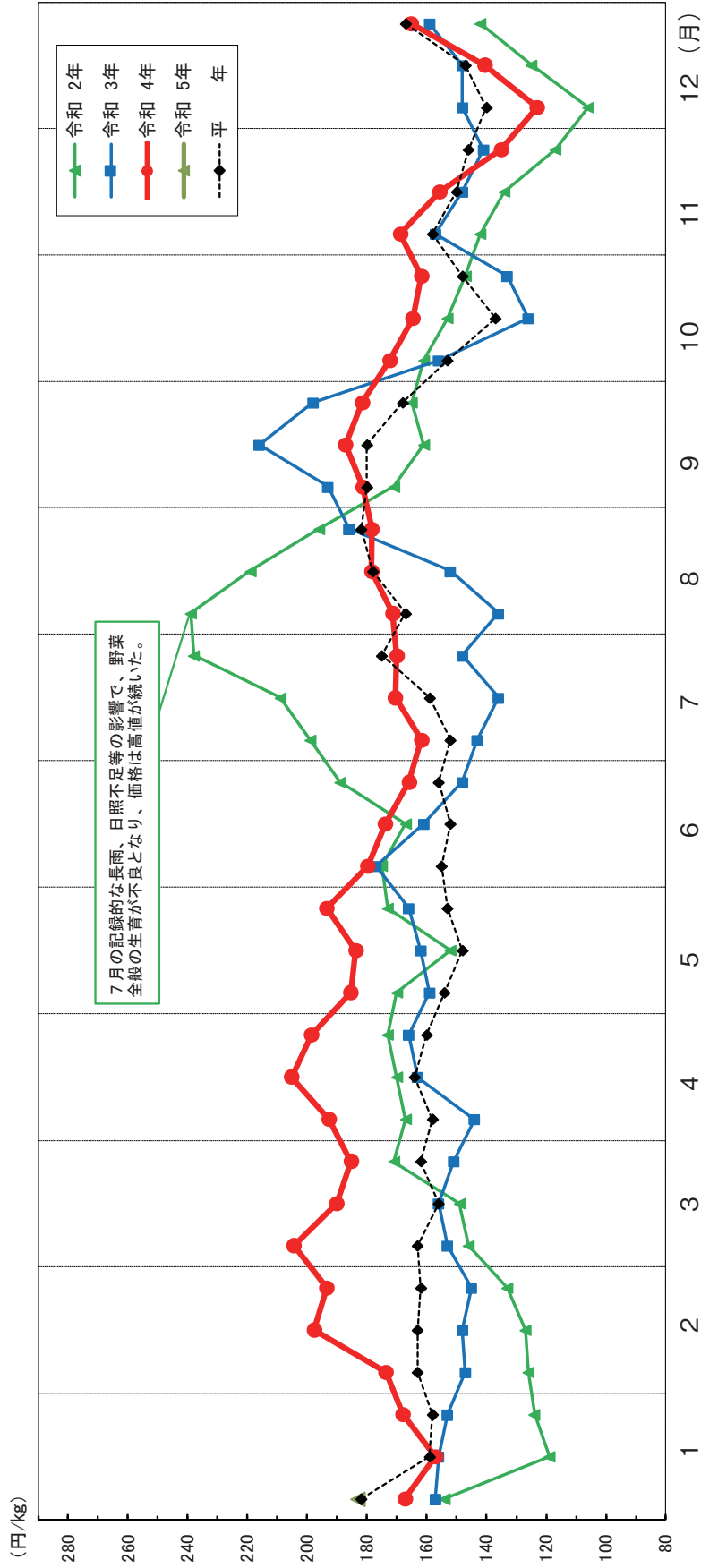
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月															
	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬														
令和2年	195	156	159	152	154	156	171	175	204	202	201	199	199	169	193	194	180	208	218	227	269	247	210	187	177	190	194	176	169	164	149	132	126	140	166			
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179		
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191		
令和5年	208																																					
平年	212	183	184	188	189	184	188	181	190	184	186	179	177	170	173	174	175	178	174	180	192	181	197	197	198	199	185	174	154	166	174	165	162	158	168	190		

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬													
令和2年	154	119	124	126	127	133	146	149	171	167	170	173	170	152	173	175	167	189	199	209	238	239	219	196	171	161	165	161	153	147	142	134	117	106	125	142	
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159	
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165	
令和5年	183																																				
平年	182	159	158	163	163	162	163	156	162	158	164	160	154	148	153	155	152	156	152	159	175	167	178	182	180	180	168	153	137	148	158	150	146	140	147	167	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。